

研究課題 (テーマ)		センサー付きベビーモデルを活用した育児支援構築の基礎検討	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	准教授	村田美代子
分担者	看護学部	講師	北島 友香
	情報工学部情報システム	教授	鳥山朋二
	工学科	准教授	浦島 智
		講師	森島 信
研究結果の概要			
<p>近年我が国では、婚姻率の低下や晩婚化・晩産化が進みそれに伴い出生数も減少している。また核家族が増える中、子どものいる暮らしを目にすることなく子どもを迎える親が増加している。育児に慣れない親にとっては乳児の泣き声が親のストレス要因や育児不安、ひいては虐待につながる。一般的に親は乳児が泣きやまない場合は児が満足するまで抱く行動をとるため、今回本学情報工学部情報システム工学科鳥山教授らが開発したセンサー付きベビーモデルを用いてなだめやすい抱き方について検証した。</p> <p>研究方法は、育児経験がない大学生と県内の助産師を対象に、未定頭のセンサー付きベビーモデルを用いて抱かれている際の支持部位、頭部と体部の方向、揺れの速度を測定し同時に録画にて観察した。抱き方は横抱き（抱きやすい側10分とその反対を5分）と縦抱き（5分）で、それぞれ開始2分で録音した乳児の泣き声を40秒流した。</p> <p>結果は、助産師、大学生（男性4名、女性8名）共に12名の参加があった。抱きやすい側の横抱きでは、ベビーモデルの頭側が助産師は全員利き手と反対側であったが、大学生の50%は利き手と同側で抱いていた。特徴量から助産師と学生の抱き方の違いとして、横抱きは、体の向きと揺らし方、頭・首・腕部への触れ方が、縦抱きは、頭と体の向きと揺らし方、頭・首・臀部での触れ方に違いがみられた。助産師はベビーモデルを抱いた直後から周期的揺れがみられなだめ行動が見られたが、大学生は約3割のみに周期的揺れがみられた。乳児の泣き声には助産師も大学生も身体の揺れや話しかけ、リズムカルに乳児に触れるなどの行動が見られた。センサー付きベビーモデルを用いることで、助産師、大学生の抱き方の特徴の違いが明らかとなり、児の触れ方、頭と体の向きと揺らし方においてなだめやすい抱き方の視点として検証できた。</p>			
今後の展開			
<p>助産師の抱き方に着目して乳児のなだめ行動の特徴を可視化し、これを月齢の浅い乳児を持つ親に対する健康教育に活用することで、わが子のなだめやすさの向上につながり、育児に対する不安や苛立ちの軽減が期待される。さらに、妊娠期から母親・父親に対して、センサー付きベビーモデルを用いて未定頭児の抱き方を体感できる機会を提供することは、出産準備教育としても有効であると考えている。</p>			